



Title	郭店楚簡總論
Author(s)	浅野, 裕一
Citation	中国研究集刊. 2003, 33, p. 4-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60790
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【郭店楚墓竹簡關係】

郭店楚簡総論

郭店一号楚墓は、春秋・戦国期の楚の国都・郢の近郊に位置する、楚の貴族の墓陵地の中にある。近隣の農民が畑の土壌用に墳丘の土を削り取ったため、棺の端が露出するに至り、二度にわたって盗掘の被害を受けた。その後、一九九三年冬に本格的な発掘調査が行われた結果、被葬者の人骨や副葬品とともに、薪束のように固まった状態で八〇〇余枚の竹簡が出土し、その中の七三〇枚に先秦の古文に属する文字が記されていた。

副葬品中に墓主や下葬年代を特定する紀年資料は発見できなかったが、櫛や双耳杯など、さまざまな副葬品の様式変化に基づく編年から、中国の考古学者はその造営時期を戦国中期（前三四二年～前二八二年）の後半、前三〇〇年頃と推定している。この推定は、一九八六年から一九八七年にかけて発掘され、副葬品の紀年から前三一六年の造営であると確認された湖北省荆門市の包山二号楚墓を含め、江陵周辺の多くの楚墓から出土した副葬品の分析結果から得られた編年によるものであり、このように豊富な資料を用いた考古学的編年に依拠した年代

比定は、ほぼ動かないと見るべきであろう。

また郭店一号楚墓が位置する楚の墓陵地に関しては、『史記』白起王翦列伝に「其の明年楚を攻め、郢を抜きて夷陵を焼く。遂に東のかた竟陵に至る。楚王は亡げて郢を去り、東に走りて陳に徙る。秦は郢を以て南郡と為す」との記載がある。中国の研究者はこの『史記』の記述を踏まえ、前二七八年、秦の將軍・白起が楚都・郢（紀南城）を占領した時点で、楚の貴族集団は紀南城を放棄して東北の陳に遷都し、紀南城周辺の墓陵地もまた放棄されて、以後この地に貴族の墓が造営されることはなかったとする。こうした歴史的経緯を踏まえるならば、一号楚墓の造営時期の下限は前二七八年であり、下葬時期をそれ以降に引き下げることは、物理的に全く不可能となる。

副葬品の中には「東宮之師」と刻む耳杯があり、この点から墓主は楚の太子の教育係だったと考える説もある。ただし耳杯の銘文は「東宮之杯」と釈読すべきだとする説も唱えられている。この場合、耳杯は太子から下賜された品となるから、墓主の身分を特定する決め手にはなりにくい。

また副葬品中には、君主が高齢者に下賜する鳩杖二本も含まれていた。戦国期における鳩杖下賜の基準が不明

であるため、明確に断言はできないが、漢代の基準を準用すれば、墓主は七十歳を超す高齢だったと推定される。

出土した竹簡は、荊州市博物館や荊門市博物館の研究者の手によって解説・整理され、写真と釈文を収めた『郭店楚墓竹簡』が一九九八年五月に文物出版社から刊行された。それによれば竹簡は、竹簡の両端が平斉であるか梯形であるか、皮紐の数が両道であるか三道であるかといった形状の相違や、寸法の差異など簡式上の特色や、書体の差異、及び内容などから、次の十六種の文獻に分類・整理されている。

- (1) 『老子』甲・乙・丙 (2) 『太一生水』
 - (3) 『緇衣』 (4) 『魯穆公問子思』
 - (5) 『窮達以時』 (6) 『五行』 (7) 『唐虞之道』
 - (8) 『忠信之道』 (9) 『成之聞之』 (10) 『尊德義』
 - (11) 『性自命出』 (12) 『六德』 (13) 『語叢』一
 - (14) 『語叢』二 (15) 『語叢』三 (16) 『語叢』四
- この中、(1)と(2)は道家系統の著作、(3)から(12)の十篇は儒家系統の著作、(13)から(16)は短文から成る教育用の格言集だと考えられる。また(1)の『老子』甲・乙・丙は、完本を節録した三種類の抄本だと考えられる。

ここで郭店楚墓竹簡が持つ意義について、若干説明してみよう。一九七〇年代以降、中国では古代文獻の発見が相次いでいる。一九七二年に山東省臨沂県銀雀山の前漢墓から、『吳孫子兵法』と『齊孫子兵法』に該当する二種類の兵法書や、『尉繚子』『六韜』『晏子春秋』などの竹簡が出土した。翌一九七三年には、湖南省長沙馬王堆の前漢墓から、二種類の『老子』や黃老思想に関する古佚書、『周易』『戦国縦横家書』など、大量の帛書が出土した。また一九七五年には湖北省雲夢睡虎地の秦墓から、秦の法律に関する文書や、『日書』と呼ばれる占いの書物などの竹簡が出土した。さらに安徽省阜陽雙古堆の前漢墓からは、『蒼頡篇』『詩經』『周易』などの竹簡が出土した。

こうした考古学的発見により、これまで偽書の烙印を押されてきた書物が復権したり、成立年代をめぐる論争に有力な手掛かりが提供されるなど、大きな成果が得られた。だが一九七〇年代に発掘された墳墓は、ほとんどが秦漢期の造営であったため、疑古派と信古派の論争を決着させる決め手とはならなかった。なぜなら疑古派と信古派の論争は、おおむね春秋・戦国期の成立とされてきた文獻に対して、伝承通りに先秦の書とみなす(信古)か、そうした伝承を疑って秦・漢以降の書とみなす(疑

古)かを主な対立軸として続けられてきており、秦漢期の墓から発見された書物に対し、依然としてそれを秦漢期に成立したと見る疑古的解釈が跡を絶たなかったからである。

これに対して郭店楚墓竹簡の場合は、戦国中期、前三〇〇年頃の楚墓からの出土であるため、その中に論争の対象とされてきた書物が含まれていたり、その書名が記されていたりすれば、その書物の成立年代が戦国中期以前であり、先秦の古書であることが確定する。郭店楚墓竹簡が持つ大きな意義は、まさしくこの点にある。これまでの中国古代思想史の研究においては、思想史を組み立てる材料となるべき個々の文献そのものについて、本来にそれを先秦の書として扱って良いのかとの疑念が払拭できず、なかなか確定的な判断を下せないとの制約が付きまわっていた。先秦の資料であることが明確な郭店楚墓竹簡の発見によって、こうした壁が一部分にせよ、初めて破られたわけであり、それが今後の中国古代思想史の研究にもたらす利益は計り知れない。この意味で郭店楚墓竹簡の発見は、まさに画期的な出来事と言えよう。

無論これ以外にも、伝世本が存在する文献については、竹簡本との対校によってテキストの校訂が前進したり、古文のテキストの実態が解明されて今文のテキストとの

比較が可能となったりするし、伝世本が存在しない文献の場合は、未知の思想が新たに提供されたりする。また名のみ有名で、実態が不明だった先秦の古文に対する研究も、実際の文字資料を得て初めて本格的な研究が可能となった。郭店楚墓竹簡の発見によって、中国古代思想史研究は、全く新しい時代に入ったと言えるのである。

(浅野裕一)